

大学運動部員における高校期の被体罰経験と 運動部空間の特性に関する研究

A study of experiences of corporal punishment
of sports-oriented university student in high school life
and characteristic of athletic club space

村本 宗太郎 松尾 哲矢
MURAMOTO Sotaro MATSUO Tetsuya

Abstract

Many young people in Japan join athletic club activities and enjoy playing sports. However there are a lot of problems in athletic club activities. Corporal punishment from coaches to club members is one of them. The purpose of this study was to examine the generation status and causal factors of corporal punishment by focusing on particularity of high school athletic clubs as space. In this study, a questionnaire survey to 438 university students belonging to athletic clubs was conducted asking about corporal punishment, its evaluation and permission, the attitude of coaches and the recognition of the athletic club space. As a result, approximately 30% have experienced of corporal punishment during club activities in high school. If members showed bad manner or were late for clubs, they were easy to permit corporal punishment from their coaches. Many members thought attitude of coaches in athletic clubs were more awful than ordinary school life and they recognized athletic club space exclusive and segregated. In conclusion, it was suggested that corporal punishment easily occurs in athletic club spaces, because it is not an education part of the regular curriculum, and because the authority and the position of the teachers are strengthened.

Key words: Corporal punishment, Athletic Club Activities, High School, Coach, Club Member

1. 緒言

近年、我が国において青少年とスポーツとの関係について様々な言及がなされている。2011（平成23）年に制定されたスポーツ基本法の前文では、「スポーツは、次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすものである」〔文部科学省（2011）〕とされており、青少年の体力面だけでなく精神面に対するスポーツの影響力について言及されている。2012（平成24）年に文部科学省が提示した、スポーツ基本計画の中では、スポーツ推進の基本方針として、「子どものスポーツ機会の充実」が挙げられ、「青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育むなど人格の形成に積極的な影響を及ぼし、次代を担う人材を育成するため、子どものスポーツ機会を充実する」〔文部科学省（2012）〕と、スポーツ基本法と同様の言及がなされている。このように、青少年がスポーツ活動に取り組むことの重要性が指摘されている。現在、我が国において青少年が日常的にスポーツ活動に親しむことができる場としては、中学校や高等学校（以下「高校」とする）における学校運動部活動（以下「運動部」とする）を中心的な存在として挙げることができる。運動部に関して文部省は、「我が国の文教施策」の中で、「運動部活動は生徒のスポーツ活動と人間形成を支援するものであることはもとより、その適切な運営は、生徒の明るい学校生活を一層保障するとともに、生徒や保護者の学校への信頼感をより高め、さらには学校の一体感の醸成にもつながるものである。」〔文部省（1998）, pp.115-116〕と、その有用性について言及している。このように運動部の有用性が指摘される一方で、運動部は多くの問題を抱えており、その一つとして運動部指導者から部員に対する体罰問題を挙げることができる。運動部における体罰問題は、これまで毎年発生しており、競技団体やマスメディアから問題視されながらもなお繰り返されているのが現状である。2013（平成25）年には、（公益財団法人）日本体育協会を中心に、「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」が発表された。宣言の中では、「指導者、スポーツを行う者、スポーツ団体および組織は、スポーツの価値を守り、21世紀のスポーツの使命を果たすために、暴力行為根絶に対する大きな責務を負っている。」〔日本体育協会（2013）〕とされ、スポーツ界からの暴力行為の根絶が宣言された。しかし、その後も運動部における体罰は一向に後を絶たず、スポーツ界や運動部の現場から、体罰が根絶されたとはいえないのが現状である。運動部における体罰問題の根本的な解決は、青少年の健全な人格形成や教育、および日本スポーツの発展のために重要な課題であると考えられる。これまでの運動部における体罰問題の発生後は、体罰を行った運動部指導者の指導上の倫理性の欠如が指摘され、その指導者に対する謹慎処分や、問題を起こした運動部の活動禁止処分や大会参加の辞退といった、体罰問題の当事者に対して責任の所在を求める場合が多くみられていた。このように、運動部における体罰問題はこれまで、指導者の指導にかかわる倫理的な問題として捉えられることが多く、「運動部の内部でなぜ体罰が発生するか」といった、問題発生の背景や運動部の構造につ

いては、これまで必ずしも分析が十分ではなかったといえよう。今後、運動部における体罰問題の根本的な解決を目指すうえでは、この点について検討を行う必要があると考えられる。

運動部における体罰問題に関する先行研究としては、阿江（1990）、野地・吉田（1996）、富江（2008）にみられるような、体育学的な視点から大学生を調査対象として、運動部指導の現場における体罰の実態や、体罰行為に及ぶ指導者の特徴等に関する研究が挙げられる。運動部において体罰行為に及ぶ指導者に着目した研究として、阿江（1990）は、体罰を行う指導者は若く、礼儀、規則に厳しい教員であることを明らかにした。野地・吉田（1996）は、指導するスポーツ活動の経験者で、勝利への執着が強い教員が体罰行為を行いやすいことを明らかにし、このような指導者は、「生徒の身になって考えてくれる」として生徒からの評判が良い教員であると評価されていることに言及している。富江（2008）は、団体競技内では指導者による体罰が多く、その理由として、体罰は集団をコントロールする手段として即効性があり、安易に実行できる点を指摘している。また、宮田（1994）、楠本・立谷ら（1998）、安田（1999）、高橋・久米田（2008）らは、男子部員や、指導者による被体罰経験者は体罰容認の意識が根強いことを指摘している。大学生を対象とした調査研究以外の先行研究では、クラブ活動の学校内の位置づけや、クラブ集団内の主将と部員、先輩と後輩等の部員同士の関係性、運営構造等に着目した城丸（1980）、日本の体罰史に着目し、それぞれの時代における体罰の扱われ方について言及した江森（2013）、運動部と学校教育制度の歴史との関係、体罰発生の要因が学校内における教員の役割や権威主義にあったことについて言及した神谷（2014、2015）、等の研究を挙げることができる。

これまでの先行研究において大学生を対象とした調査研究からは、運動部における体罰の実態や生徒の体罰に対する考え方、体罰行為に及ぶ指導者の特徴等が明らかにされてきており、また、大学生を対象とした調査研究以外では、クラブ集団内における先輩と後輩の関係や、体罰の歴史的な背景、教員の権威主義が体罰に関与していること等が指摘されてきている。このように、これまでの研究において、体罰を行う指導者の特徴や、部員の体罰への意識に着目した研究は多いものの、運動部内において成立する、指導者と部員との関係や、その集団特性と体罰の発生との関連については十分に検討されてきたとはいえない。

そこで本研究では、学校教育における指導者と部員との関係、集団特性、体育館のような閉鎖的な空間特性といった運動部空間の特殊性に着目し、体罰の発生状況とその要因を検討することを目的とする。

Ⅱ．本研究における分析視点と作業仮説

1．分析視点の検討

ここでは運動部空間が持つ、体罰が誘発されやすいと考えられる要因について、まずスポーツと暴力の関係について論じる。そのうえで、本研究における分析視点として、「運動部における教員の権限の強化」と、「運動部空間における他の学校教育空間からの乖離」の二点から検討し、本研究における作業仮説を提示する。

まずスポーツと暴力の関係に関して、ノルベルト・エリアス（1995）は、スポーツという場について、社会の中における、「抑制の中の脱抑制」として論じている。エリアスは、人々が日常生活の中で様々な抑制を受けていると指摘する。例えば、一般社会で他者へ暴力をふるうことは、社会規範や社会常識、法の制約があることから容易に行うことはできない。そのため人々は、社会の中で暴力を行使しようとする衝動に駆られたとしても、その衝動を自分自身で抑制し、外部に表現することはあまりしないのである。エリアスは、それを文明化の過程の中で抑制された身体であるとし、抑制された社会の中での脱抑制の場としてのスポーツについて言及している。「抑制の中の脱抑制」の場としての特徴をもつスポーツは、そもそも競技の持つ特性として、競技者同士の身体的な接触が避けられない場面が存在する。そのような身体的接触が単なる暴力とにならないために、それぞれのスポーツには様々なルールや、フェアプレー、スポーツマンシップといった倫理観が存在し、選手の身体を抑制している。しかし、それでも脱抑制の場として存するスポーツの中における暴力性が誘発されやすい点に言及している。このように、スポーツと暴力との間には一定の親和性があるとの指摘がみられるものの、であるからこそ倫理観に基づく指導者と部員の関係、集団のあり方、活動が行われる環境等が常に問い直される必要がある。なかでも運動部の場合、学校教育の一環として行われることから教員が指導者となる場合が大半であること、学校の中の限定された空間（体育館など）で行われていることに着目する必要があるだろう。そこで本研究では、分析視点として運動部内における関係性と運動部空間の二点から検討を行う。

1.1) 運動部における教員の権限と立場の強化

まず、運動部指導者である教員の権限と立場が、運動部内で強化されていることが考えられる。学校教育の中において中心的な活動とは、通常の授業やホームルームといった正課教育である。教員は、正課教育の中では、学習指導要領で示された方針と方法に基づいた指導を行わなければならない。そのため、正課教育の中で教員に与えられた指導に関する自由な裁量の範囲は非常に限られたものとなっている。これに対し、運動部では、指導方針や方法に関して、正課教育のように詳細には示されておらず、正課教育と比較すると教員に与えられた自由な裁量の範囲は相対的に広がっている。また運動部は、生徒の自主的な参加にもとづく活動であるとされる。これらのことから運動部の場面では、指導者である教員が、正課教育よりも広く自由な裁量を与えられ、自由な指導を行うことが出来るのである。このことから、運動部内では指導者である教員の権限と立場が強化されているものと考えられる。

1.2) 学校教育空間からの運動部空間の乖離

次に、運動部という空間が、学校教育空間から乖離していることが考えられる。現在の部活動に関して、中学校新学習指導要領第1章総則第4「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」において、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育

の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」[文部科学省（2010）]とされている。この中で、部活動は学校教育の一環として、教育課程との関連が図られる必要があることについて指摘されている。しかし実際には、正課教育の活動場所である教室と、体育館やグラウンドといった各運動部の活動場所との間に存在する物理的な距離や限定的な空間的特徴に加えて、実際の教育現場にいる教員や生徒にとっては、正課教育と運動部とは別物であるという心理的な乖離があると考えられる。つまり運動部は、その活動に関して、正課の教育課程との関連を求められながら、実際は正課の学校教育から乖離した空間であると認識されているものと考えられる。

2. 作業仮説の提示

ここまで、体罰が誘発されやすい空間としての運動部を考えるうえで、スポーツと暴力との親和性について述べた後で、「運動部における教員の権限の強化」、「運動部空間における他の学校教育空間からの乖離」という本研究での分析視点について論じた。これらの内容にみられる、運動部空間の持つ特徴が、体罰を誘発しやすい要因となっているのではないかと考えられる。これらを総合すると、運動部とは、学校部活動の中でもスポーツが持つ暴力性が誘発されやすい場所であり、指導者の自由な裁量と権限および立場が、学校教育の中で相対的に拡大、強化され、通常の授業のような正課教育から乖離した場所に位置する存在になっているものと考えられる。以上のことを踏まえて、本研究では、「学校の正課教育から離れた場所として、教員の権限と立場が強化されることによって体罰が誘発されているのではないか」という作業仮説を設定した。

Ⅲ. 調査概要

1. 調査対象

調査対象は、関東の総合大学5校（A大学、B大学、C大学、D大学、E大学）に在籍し、大学体育会に所属している大学生生合計438名（A大学308名、B大学48名、C大学23名、D大学30名、E大学29名）である。今回行った調査では、運動部の中でも特に高校時代に所属していた運動部に関する経験について着目した。そこで、高校生時にも運動部に所属していたと考えられる、大学体育会に所属している学生を調査対象とした。

2. 調査時期と方法

本調査は2013年6月から7月にかけて行った。調査協力に応じた各大学体育会運動部の担当者に質問紙を配布し、各部で回答をしてもらったうえで回収した。質問紙は552部配布し、438部の有効回答を得た（回収率79.3%）。

3. 調査項目の構造

- ・調査対象者の基本的属性

- ・部活動中における体罰の実態及び評価に関する項目
- ・体罰の許容度に関する項目
- ・高校運動部における指導者の態度に関する項目
- ・高校運動部の空間認識に関する項目

4. 倫理的配慮

本研究での質問紙調査を行うにあたり、立教大学個人情報保護規程に即して実施した。調査対象者・団体等の匿名性に十分配慮し、対象者の名誉やプライバシー等の人権を侵害することがないように心がけ、データ管理も十分な管理体制をとった。また、調査対象者である大学生に対しては、質問紙の配布段階において、調査の目的・概要、対象者のプライバシーの保護、調査結果はすべて統計的に処理され、研究目的以外の使用がなされないことを記述した調査依頼文を添付した。

5. サンプル特性

回答者の性別は、男性82.0%、女性18.0%であった。学年は、1年生37.4%、2年生29.7%、3年生18.9%、4年生13.9%であった。所属学部は、体育・スポーツ関係学部・学科26.1%、その他の学部・学科73.9%であった。高校の入試形態は、一般入試41.7%、スポーツ推薦入試32.5%、その他入試25.8%であった。大学の入試形態は、一般入試32.2%、スポーツ推薦入試30.5%、その他入試36.7%であった。高校設置主体は、国公立高校45.5%、私立高校54.0%であった。なお、本調査対象者全員が高校時、運動部に所属していた。

IV. 調査結果と考察

ここでは、調査結果について、運動部中における体罰の実態と評価、体罰の許容度、体罰と指導者の態度、体罰と運動部空間の認識、といった点から検討を行う。

1. 運動部活動中における体罰の実態と評価

まず、小学校から大学までの部活動中に受けた、被体罰経験（「日常的に受けていた」＋「数度受けたことがある」＋「一度だけ受けたことがある」）は、小学校時22.6%、中学校時34.3%、高校時29.7%、大学時2.9%であった。体罰の頻度に関して高校時に着目すると、「日常的に受けていた」7.1%、「数度受けたことがある」19.2%、「一度だけ受けたことがある」2.7%であった。今回の調査では、高校における部活動時における体罰の多くは、一度限りではなく、複数回にわたって受けている様相がみられた。

次に、部員自身の被体罰経験に関して、現在どのように考えているかという、体罰に対する評価についての質問を行った。その結果、「愛のムチとして、自分を高めるきっかけを与えてくれたと思う」とした回答が52.8%と最も多く、「今思い返しても許し難いが、自分のためになったと

思う」18.4%、「愛のムチであったと思うが、やはり納得できない」13.6%、「今思い返しても許し難いし、何ら自分のためになったとは思わない」8.0%という結果であった。この結果から、今回の調査における半数以上の学生は、部活動中の体罰について、指導者による愛のムチであると捉えており、回答者の71.2%が、体罰は自分のためになったと評価していた。

2. 体罰の許容度

ここでは、高校部活動において、指導者からの体罰を受けた経験がある回答者（「日常的に受けていた」＋「数度受けたことがある」＋「一度だけ受けたことがある」）を「体罰経験群」、体罰を受けた経験が一度もない回答者を「非体罰経験群」として比較分析を行った。体罰経験群と非体罰経験群が、指導者からの体罰に関して、どのような場合であればその体罰を許容することができるか、という内容を示しているのが、図1・2である。質問項目では、運動部において想定することができる様々な場面を挙げ、その場面ごとに指導者から体罰を受けた場合、その体罰を許容することが出来るか否かということについて質問を行った。その結果、部員は指導者からの体罰をまったく許容できないとは考えていないこと、いずれの場面においても体罰経験群は、非体罰経験群と比較すると、指導者から受ける体罰を許容しやすいという傾向が看取された。

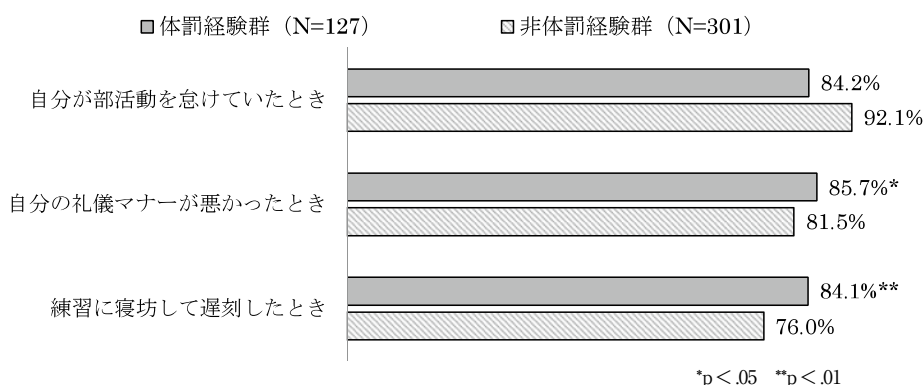


図1. 体罰の許容度①（「許容できる」「やや許容できる」の合計）

図1の体罰の許容度①は、体罰経験群、非体罰経験群間で差異がみられなかった項目（場面）について示したものである。「自分が部活動を怠けていたとき」、「自分の礼儀マナーが悪かったとき」、「練習に寝坊して遅刻したとき」といった項目では、両群ともに75%以上が、指導者からの体罰を許容できるとした。これらの項目は、部員の態度やマナーに関する項目であり、部員側にも一定の問題があると考えられる場面であるともいえよう。このような、部員の態度やマナーに関する場面では、部員は指導者から体罰を受けたとしてもそれを許容するという傾向がみられた。

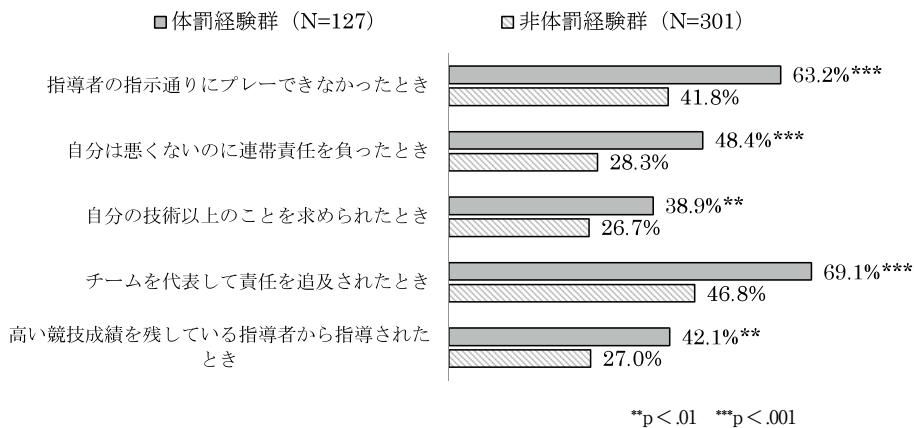


図2. 体罰の許容度②（「許容できる」「やや許容できる」の合計）

図2の体罰の許容度②は、体罰経験群、非体罰経験群間で差異がみられた項目（場面）について示したものである。「自分は悪くないのに連帯責任を負ったとき」や、「チームを代表して責任を追及されたとき」といった項目で有意な差がみられ、これらの項目では、体罰経験群の学生は、指導者からの体罰を許容する傾向が強くみられた。この中でも、「高い競技成績を残している指導者から指導されていたとき」に受ける体罰についても許容することができる、とする結果は、指導者が高い競技成績を残していることで、指導者の指導法が運動部内において正当化された結果起こりうるものであり、運動部空間における指導者の権威の増大が考えられる。

3. 体罰と指導者の態度

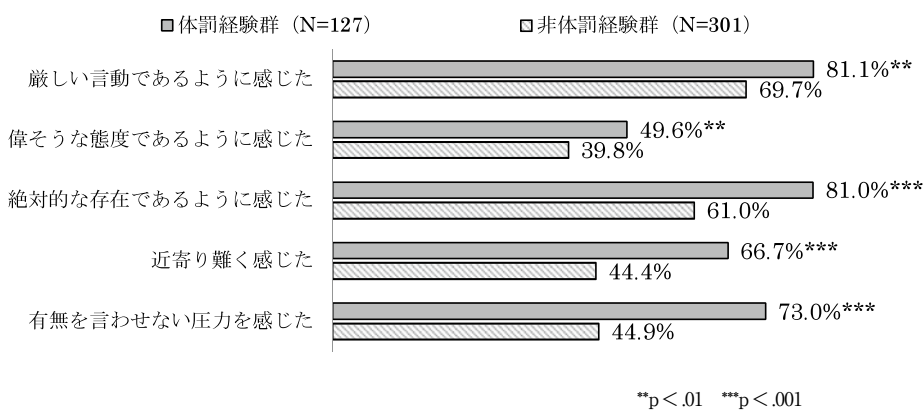


図3. 運動部での指導者の態度（「非常にそう思う」「ややそう思う」の合計）

次に、指導者である教員の態度について、授業やホームルーム等の日常における学校生活と運動部の活動中とを比較したときにどのような違いがみられたか、という内容について質問を行った。その内容をまとめたものが、図3である。

その結果、体罰経験群は、日常の学校生活よりも運動部における指導者の態度に関し、図3に示した、「厳しい言動である」、「偉そうな態度である」、「絶対的な存在である」、「近寄り難い」、「有無を言わせない圧力を感じる」といった項目について、「そう思う（「非常に」＋「やや」）」と回答する割合が有意に高くなっていた。ここから、体罰を行うような運動部指導者は、運動部空間において、部員にとって畏怖の対象ともいえる態度を表していることがみられた。これは、運動部空間において、指導者自身の権限や立場が学校の日常生活よりも強化され、そのことが運動部における態度として表出しているものと推察される。

4. 体罰と運動部空間の認識

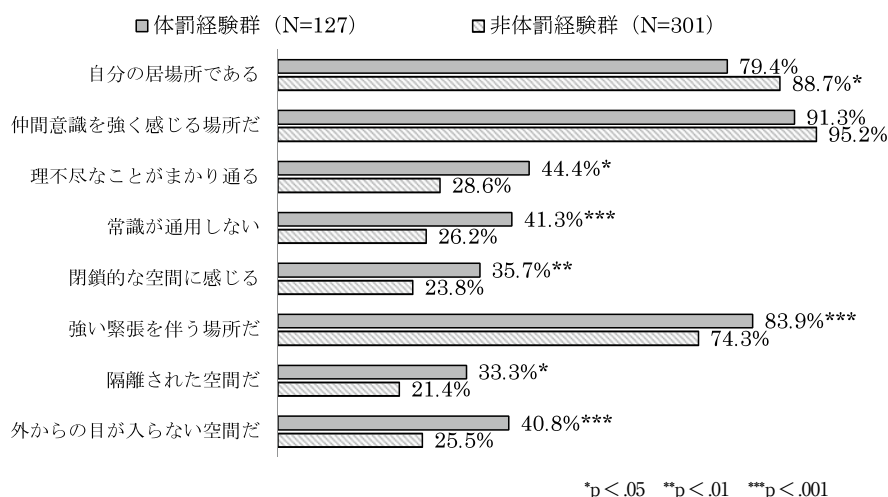


図4. 他の学校内の空間と比較した運動部空間の認識（「非常にそう思う」「ややそう思う」の合計）

次に、運動部空間に関して、他の学校内の空間と比較してどのような空間であるか、という内容に関する質問を行い、その結果をまとめたものが、図4である。

その結果、部員は全体として、「自分の居場所である」、「仲間意識を強く感じる場所だ」といった項目では、「そう思う（「非常に」＋「やや」）」と回答している割合が高く、運動部空間についてポジティブな認識をもっていた。その一方で、「強い緊張を伴う場所だ」の項目も共通して肯定する割合が高く、多くの部員は、運動部空間を自らの居場所であると考えつつも、強い緊張を伴う場所であると認識していることがみられた。また、体罰経験群と非体罰経験群を比較すると、「強い緊張を伴う場所だ」に加え、「常識が通用しない」、「外からの目が入らない空間だ」といった項目は0.1水準の危険率で有意な差がみられた。ここから、体罰が発生しているような運動部

に所属していた部員は、運動部空間について、閉鎖的で常識が通用しないような空間であると認識していたことがみられた。

V. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、運動部における体罰問題に関し、「運動部における教員の権限の強化」と「運動部空間における他の学校教育空間からの乖離」の二点の分析視点から、「学校の正課教育から離れた場所で、教員の権限が強化されることによって体罰が誘発されているのではないか」という作業仮説について検討を行った。

調査結果から、運動部での体罰の実態としては、中学校、高校では約3割の生徒が部活動中に体罰を受けた経験を有していた。体罰に対する評価としては、半数以上が体罰を愛のムチであると評価していた。また部員は、指導者からの体罰をまったく許容できないという考え方は比較的少なく、部員自身の礼儀やマナーが悪かった場面や、部活への遅刻といった場面では、指導者からの体罰を許容する傾向が強く、被体罰経験のある学生は、被体罰経験のない学生よりも、チームとして連帯責任を負う場面や、チームを代表して責任を追及された場面等の、部員自身に非がないと考えられる場面でも指導者からの体罰を許容しやすい傾向がみられた。また、運動部中における指導者の態度は、日常の学校生活よりも畏怖の対象として捉えられやすい傾向がみられ、運動部という空間については、閉鎖的で常識が通用しないような空間であると捉えられていることがみられた。このような傾向は、被体罰経験者に顕著にみられた。以上の結果から、作業仮説については一定程度支持されたものといえよう。

今回の研究では、運動部空間に関して部員側からの調査を基に検討を行った。今後は、指導者側に対する調査を行うことで、指導者自身が、運動部中における自身の態度や運動部空間に対してどのような認識をもっているか、という点について調査する必要がある。今後の課題としたい。

引用参考文献一覧

- ・阿江美恵子（1990）「スポーツ指導者の暴力的行為について」『東京女子体育大学紀要』25, pp.9-16。
- ・阿江美恵子（1996）「指導者の体罰行動についての評価」『日本体育学会大会号』47, p.220。
- ・阿江美恵子（1997）「運動部活動と体罰—指導行動にみられる心理学的問題—」『日本体育学会大会号』48, p.71。
- ・阿江美恵子（2014）「運動部活動における体罰が子どもに及ぼす影響」『体育科教育学研究』30（1）, pp.63-67。
- ・朝日新聞（1996）「体罰一切禁止を確認 生徒側が勝訴 東京地裁、慰謝料支払いを命令」1996年9月17日夕刊, 15面。
- ・朝日新聞（2008）「天草市が上告へ PTSD訴訟」2008年3月8日朝刊, 31面。
- ・朝日新聞（2013）「桜宮高バスケット部暴行判決（要旨）」2013年9月26日夕刊, 11面。
- ・朝日新聞（2013）「部活中の暴力、批判 遺族『負の連鎖を変えて』 桜宮バスケット部顧問に有罪」2013年9月26日夕刊, 11面。
- ・朝日新聞（2013）「暴力指導有罪 再発の温床なくさねば」2013年9月27日朝刊, 12面。

- ・朝日新聞（2013）「親と学校の負のスクラム解消を」2013年10月2日朝刊，24面。
- ・朝日新聞（2015）「元監督の部員暴行有罪判決」2015年10月22日朝刊，36面。
- ・江森一郎（2013）『体罰の社会史新装版』新曜社。
- ・濱嶋朗ら編（2005）『社会学小辞典』有斐閣。
- ・日野克博・大友智・細越淳二（2014）「学校教育における運動部活動と体罰を問う」『体育科教育学研究』30（1），pp.49-50。
- ・井上俊・菊幸一編著（2012）『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房。
- ・石川泰成（2014）「体罰に係わる実態把握の結果等について」『体育科教育学研究』30（1），pp.51-56。
- ・神谷和宏（2013）「体罰によらない子どもの意欲のめたせ方：年度始めに知ってほしいコーチング」『月刊生徒指導』43（4），pp.30-33。
- ・神谷和宏（2014）「部活指導でどう声をかけるか？：～コーチングを使った体罰を伴わない叱り方・イメージトレーニング～」『月刊生徒指導』44（2），pp.28-32。
- ・神谷拓（2014）「運動部活動の制度史と今後の展望」『体育科教育学研究』30（1），pp.75-80。
- ・神谷拓（2015）『運動部活動の教育学入門—歴史とダイアログ』大修館書店。
- ・神谷拓・菊幸一（2015）「体罰・暴力の根絶に向けた運動部活動教育の内容と条件整備—教師の専門性と運動部活動指導の関係に注目して—」『体育学研究』60（Report），R12_1-R12_16。
- ・加野芳正（2014）「近代の学校教育制度と暴力—『体罰』と『いじめ』を中心に—」『スポーツ社会学研究』22（1），pp.7-20。
- ・片山紀子（2015）「アメリカに見る規律形成の今日的動向—体罰をめぐる議論を通じて—」『京都教育大学紀要』126，pp.13-24。
- ・菊幸一（2009）「学校運動部活動が抱える諸問題と生涯スポーツ」『季刊教育法』162，pp.12-19。
- ・近藤良享（2012）『スポーツ倫理』不昧堂出版。
- ・楠本恭久・立谷泰久・三村覚・岩本陽子（1998）「体育専攻学生の体罰意識に関する基礎的研究：被体罰経験の調査から」『日本体育大学紀要』28（1），pp.7-15。
- ・文部科学省（1998）『我が国の文教政策第1部第3章第2節3 運動部活動の充実』。
- ・文部科学省（2007）『問題行動を起こす児童生徒に対する指導について』。
- ・文部科学省（2010）中学校学習指導要領。http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/sou.htm（2016年8月30日）
- ・文部科学省（2011）スポーツ基本法。http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm（2016年8月30日）
- ・文部科学省（2012）スポーツ基本計画。http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_jcsFiles/afiedfile/2012/04/02/1319359_3_1.pdf（2016年8月30日）
- ・文部科学省（2013）『体罰禁止の徹底及び体罰に係る実態把握について』。
- ・文部科学省（2013）『体罰根絶に向けた取組の徹底について』。
- ・文部科学省（2013）『体罰の禁止及び児童生徒理解に基づく指導の徹底について』。

- ・文部省（1998）『我が国の文教施策 心と体の健康とスポーツ』大蔵省印刷局。
- ・中澤篤史（2014）「運動部活動の歴史の変遷と『社会的意義』」『体育の科学』64（4），pp.226-230。
- ・日本体育協会、日本オリンピック委員会、日本障害者スポーツ協会、全国高等学校体育連盟、日本中学校体育連盟（2013）『「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」について』。http://www.joc.or.jp/news/detail.html?id=2947（2016年8月30日）
- ・西山哲郎（2014）「体罰容認論を支えるものを日本の身体教育文化から考える」『スポーツ社会学研究』22（1），pp.51-60。
- ・野地照樹・吉田武男（1996）「大学生から見たスポーツ系の部活動における体罰の実態」『高知大学教育学部研究報告』1部52，pp.139-145。
- ・ノルベルト・エリアス（1995）「スポーツと暴力に関する論文」大平章訳『スポーツと文明化：興奮の探求』法政大学出版局，pp.217-252。
- ・奥村隆（2014）『「スポーツする身体」と『教える／学ぶ身体』の交わるところ—学校運動部における『体罰』をめぐる—』『スポーツ社会学研究』22（1），pp.35-50。
- ・大澤清二・田嶋八千代・磯辺啓二郎・田神一美・渡邊正樹編（2004）『学校保健・健康教育用語辞典』大修館書店。
- ・大澤真幸ら編（2012）『現代社会学事典』弘文堂。
- ・作野誠一・石井十郎・川崎登志喜・川邊保孝・嶋崎雅規・清水紀宏・鈴木美沙都・関尾潤・高岡敦史・浪越一喜・藤井和彦・柳沢和雄（2015）「体罰・暴力根絶最終報告書」『体育学研究』60（Report），R8_1-R8_37。
- ・関喜比古（2009）「問われている部活動の在り方～新学習指導要領における部活動の位置づけ～」『立法と調査』294，pp.51-59。
- ・島本好平（2014）「青少年のここと運動部活動」『体育の科学』64（4），pp.237-241。
- ・嶋崎政男（2013）「体罰を整理する」『月刊生徒指導』43（8），pp.18-20。
- ・城丸章夫（1980）『体育と人格形成』青木書店。
- ・杉本厚夫編（2001）『体育教育を学ぶ人のために』世界思想社。
- ・スポーツ・青少年局体育参事官付（2013）「運動部活動での体罰の根絶に向けて～運動部活動での指導のガイドラインの作成～」『教育委員会月報』65（4），pp.30-44。
- ・鈴木明哲（2014）「日本スポーツ界における暴力指導への『自己反省』—体育・スポーツ史研究と教員養成の観点から—」『スポーツ社会学研究』22（1），pp.21-34。
- ・高橋豪仁・久米田恵（2008）「学校運動部活動における体罰に関する調査研究」『教育実践総合センター研究紀要』17，pp.161-170。
- ・高橋豪仁（2013）「体罰問題からのスポーツ再考 逸脱＝過剰同調としての体罰」『教育と医学』61（8），pp.652-659。
- ・富江英俊（2008）「中学校・高等学校の運動部活動における体罰」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』8，pp.221-227。
- ・友添秀則（2014）「運動部活動の指導ガイドライン」『体育の科学』64（4），pp.268-272。
- ・安田勉（1999）「体罰体験とその意識：大学生の意識調査から」『青森県立保健大学紀要』1（2），pp.151-162。
- ・読売新聞（2009）「教師、小2の胸元つかみ壁に 最高裁、体罰認定せず 逆転判決」2009年4月28日夕刊，1面。
- ・読売新聞（2009）「『体罰』訴訟逆転判決 最高裁『指導の範囲』原告側『教育とは思えぬ』」2009年4月29日朝刊，2面。
- ・読売新聞（2015）「体罰 遠い根絶」2015年12月26日朝刊，34面。